

下之郷遺跡確認調査報告書 Ⅲ

— 第34・35・36・37・38・39・40・41・42・43次 調査報告書 —

平成18年3月

滋賀県守山市教育委員会



第34次調査風景



第40次調査風景

序 文

琵琶湖の周辺には全国的にも知られる古代遺跡が数々あり、その質・量ともに豊富で多様な内容をもっています。この守山の地においても野洲川が生み出した肥沃な沖積平野がひろがっていることから、米作りが始まった弥生時代から、著名な遺跡が展開しており、稲作文化が栄えていたことがうかがえます。

今回、報告しました下之郷遺跡は、今から 25 年ほど前に発見された巨大環濠集落で、これまでに進めてきた 58 次の調査で 2100 年以上前のムラの様子が少しずつ明らかになってきています。そして、この遺跡は平成 14 年 3 月に国史跡に指定され、現在は整備活用計画を練っているところでございます。

先人が残してくれた文化財は、現代に生きる私達だけでなく、子々孫々にまで伝え残さねばならない貴重な財産であります。この大切な文化遺産を保護し、永く後世に伝えていくために、私ども一層の努力を惜しまない所存ではありますが、同時に広く市民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。今回の調査成果が、まちづくりにとって、また教育活動にとって、今後少しでも寄与するところがあれば幸いに存じます。また、本書を読んで頂き、御批判、御教示を賜れば幸甚です。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施に、ご理解とご協力をいただきました地元下之郷町の方々、ならびに関係機関に対して厚くお礼申し上げます。

平成十八年三月

守山市教育委員会

教育長 山川 芳 志 郎

例 言

1. 本報告書は、平成 11・12 年度の国宝重要文化財等保存整備費補助金で実施した重要遺跡範囲確認調査について、平成 17 年度の同事業補助金で調査報告書を作成したものである。
2. 現地調査および整理調査は守山市教育委員会で実施した。
3. 調査体制は以下のとおりで実施した。

(平成 11 年度)

教 育 長	川端 弘
教 育 部 長	中野 隆三
生涯学習課課長	堀尾 和子
同 上 参 事	山崎 秀二
同 上 主 任	川畑 和弘

(平成 12 年度)

教 育 長	川端 弘
教 育 部 長	山中 憲三
生涯学習課課長	金森 悦雄
同 上 参 事	山崎 秀二
同 上 主 任	川畑 和弘

(平成 17 年度)

教 育 長	山川芳志郎
教 育 部 長	津田 重幸
教 育 次 長	森 俊晴
文化財保護課課長	山崎 秀二
同 上 主 任	川畑 和弘

4. 現地調査および本書の編集は川畑が担当した。
5. 本調査にかかる図面・写真・出土遺物は、守山市立埋蔵文化財センターに保管している。
6. 出土遺物の写真撮影は、寿福 滋（寿福写房）に依頼した。
7. 本書で使用した土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』に準じた。
8. 測量基準点は、平成 10 年 5 月 26 日に下之郷町に設置した 3 級基準点をもとにした。

(『下之郷遺跡第 25 次発掘調査 基準点測量成果簿』)

9. 調査に参加頂いた方は、以下のとおりである。(順不同)

(現地調査) 東 久代、井入ふみ、市木尚利、岩田正彦、碓井富子、宇野 功、北村美佐子、土山博子、柴田 聡、島田泰子、杉原清子、羽橋貴子、橋本みさ子、林 益代、林 義郎、古川 弘、松山百穂子、宮本貞夫、山口弥生、山田 治、山田 栄、湯口久美子

(整理調査) 岸井紀子

10. 本調査については、文化庁記念物課坂井秀弥調査官、滋賀県教育委員会文化財保護課大沼芳幸副主幹(当時)の指導を得て実施した。
11. 現地調査にあたっては、布谷知夫・宮本真二(滋賀県立琵琶湖博物館)、河角龍典(立命館大学)のご協力を得た。
12. 現地および整理調査にあたって上記以外にも地権者をはじめ遺跡周辺の方々に、多数のご協力を得ることができた。感謝いたします。

目 次

I 位置と環境

1. 下之郷遺跡の位置と概要	1
2. 調査履歴と経過	2

II 調査成果

1. 第34次調査の成果	6
2. 第35次調査の成果	8
3. 第36次調査の成果	9
4. 第37次調査の成果	10
5. 第38次調査の成果	11
6. 第39次調査の成果	15
7. 第40次調査の成果	16
8. 第41次調査の成果	18
9. 第42次調査の成果	19
10. 第43次調査の成果	22

III まとめ	23
---------------	----

挿 図 目 次

図1 守山市と下之郷遺跡位置図	図13 第40次調査全体図
図2 下之郷遺跡全体図	図14 第40・42・43次調査位置図
図3 下之郷遺跡と周辺遺跡	図15 出土土器実測図
図4 第34・35・36・37・38・39・41次調査位置図	図16 第41次調査全体図
図5 第34次調査全体図	図17 第42次調査全体図
図6 第35次調査全体平面図	図18 第43次調査全体図
図7 第36次調査全体図	
図8 第37次調査全体図	表1 下之郷遺跡調査年譜
図9 第38次調査全体図	表2 出土土器観察表（第38次調査）
図10 出土土器実測図	表3 出土石製品観察表（第38次調査）
図11 出土石製品実測図	表4 出土土器観察表（第40次調査）
図12 第39次調査全体図	

図版目次

巻頭図版一	上：第 34 次調査風景 下：第 40 次調査風景	図版九	上：第 40 次調査平面検出状態 下：第 40 次調査平面検出状態
図版一	上：第 34 次調査地全景（北西より） 下：第 34 次調査地全景（南東より）	図版十	上：第 41 次調査状況 下：第 41 次調査状況
図版二	上：第 34 次調査遺構検出状態 下：第 34 次調査遺構検出状態	図版十一	上：第 42 次調査地全景（南東より） 下：第 42 次調査状況
図版三	上：第 35 次調査地全景（南西より） 下：第 35 次調査平面検出状態	図版十二	上：第 42 次調査平面検出状態 下：第 42 次調査平面検出状態
図版四	上：第 36 次調査地全景 下：第 36 次調査平面検出状態	図版十三	上：第 43 次調査状況 下：第 43 次調査平面検出状態
図版五	上：第 37 次調査地全景（北西より） 下：第 37 次調査平面検出状態	図版十四	上：第 38 次調査出土土器 下：第 38 次調査出土石製品
図版六	上：第 38 次調査地全景（北西より） 下：第 38 次調査平面検出状態	図版十五	上：第 40 次調査出土土器
図版七	上：第 39 次調査地全景（北東より） 下：第 39 次調査平面検出状態		
図版八	上：第 40 次調査地全景（北西より） 下：第 40 次調査地全景（南東より）		

I 位置と環境

1. 下之郷遺跡の位置と概要

守山市は滋賀県の東南部に位置し、琵琶湖の南東岸に面した平野部を占める。市域は一級河川野洲川が形成した沖積地で、山丘が無く、琵琶湖が海拔 85m 前後、市域の東端で約 106m の標高であることから、ほとんど平坦地であると言える。市域は東西約 6.3km、南北約 10.9km、面積はおよそ 44 km²を測る。東から西に傾斜する扇状地性の地形をなし、人口は東の市街地に集中する傾向がある。近畿の経済圏にあり、京阪神からの通勤時間が約 1 時間という距離から昭和 60 年代頃からベッドタウン化が進み、住宅を中心とした開発が著しく、平成 16 年には人口が 7 万人を越えることとなった。

守山市内には縄文時代から近世までの遺跡が広く分布し、現在 148 か所が確認されている。縄文時代早期には琵琶湖湖底遺跡である赤野井湾湖底遺跡が確認される他、中期から後期の集落跡（経田遺跡、下長遺跡など）が 13 か所、晩期の遺跡（服部遺跡、岡遺跡など）が 9 か所で確認されてきている。縄文人の足跡を認める琵琶湖周辺の平野部の中では最も遺跡数の多いところと言える。

一方、弥生時代には、弥生前期から後期までの遺跡が 25 か所で確認されている。弥生前期の遺跡では、突帯文土器が弥生土器と共伴する遺跡として、服部遺跡、小津浜遺跡などが平野の中でも比較的低位な場所（三角州帯）に誕生する。弥生前期中段階の土器を出土する遺跡には、服部遺跡、新段階には赤野井遺跡、赤野井浜遺跡などが湖辺部に、そしてやや内陸の自然堤防帯には中島遺跡が展開している。それから中期になると寺中遺跡、下之郷遺跡、播磨田東遺跡、二ノ畦・横枕遺跡、山田町遺跡などが湖岸から離れて内陸部扇状地末端部に偏在して展開をはじめめる。これら中期の集落は畿内第Ⅱ・Ⅲ様式期に最盛期をもつ寺中遺跡をのぞき、全て環濠を備えているのが特徴といえる。中期の集落のもう一つ特徴は、同じ場所に長期間継続して集落を営むことはせずに、短期間に移動するという現象がうかがえる。それは（Ⅱ・Ⅲ様式）寺中遺跡 →（Ⅳ様式前・中葉）下之郷遺跡 →（Ⅳ様式中・後葉）播磨田東遺跡 /（Ⅳ様式後葉）二ノ畦・横枕遺跡 /（Ⅳ様式後葉）山田町遺跡 という集落の動きが確認できる。合わせて興味深いのは、下之郷遺跡では竪穴式住居が一棟も確認されておらず、高床式建物や壁立式建物で構成されていることで、その後続集落である播磨田東遺跡や二ノ畦・横枕遺跡では、ほとんどが竪穴式住居であることの差異である形態をとっている点である。一般に民族事例をひも解いてみても同じ部族の集団が先祖から引き継いだ居住形態を放棄することは珍しく、その断絶の背景については何らかの歴史的解釈を用意していかなければならない。集落と墓域の関係では、下之郷遺跡の場合、一所に造墓するのではなく、確認されているだけでも周辺 7 か所（酒寺遺跡・八ノ坪遺跡・吉身西遺跡 2 か所・金森東遺跡・石田遺跡・今市遺跡など）に分散して認められる。そのあり方は一辺約 6～10 m 程度の方形周溝墓が 2 列配置で列状に連結して営まれており、全容が把握されている墓群はないが少なくとも十数基、多ければ 1 墓群 50 基を越える可能性が高い（図 3）。

そして弥生時代後期になると中期の集落から離れた場所に小集落として、酒寺遺跡、吉身西遺跡、金森東遺跡などが形成される他、大型建物を多数配置する拠点集落、伊勢遺跡が扇状地上に成立する。以上述べてきたように弥生遺跡の立地は、前期の湖岸周辺から後期の内陸部へ進出するという傾向を認めることができる他、前期の比較的早い時期から水田稲作を導入し、河川を利用した水田開発の行われていったことが知られる。しかし、野洲川下流域平野全域に定住集落が展開するようになるのは古墳時代に入ってからで、特に扇状地の水田開発となると古墳時代中期以降に降る可能性が高いと考えられる。

2. 調査履歴と経過

下之郷遺跡は野洲川下流域平野の中央部にあり、地形分類上の扇状地末端部分に位置している。これまでに50次以上の調査が進められ集落の様子が徐々に明らかになってきている。これまでの調査の起点にあたる第1次調査は、1980年の公共下水道工事に伴う立会調査で、溝状遺構と柱穴から弥生時代中期後葉の土器と磨製石鏃が検出されたことにはじまる。その後は、各種開発に伴う発掘調査が行なわれることとなる。1983年には都市計画道路建設にかかる発掘調査で、遺跡の南西側で幅約5～7m、深さ1.5mの大溝が10m間隔で3条並行した状態が検出され、その大溝3条を挟んで北東側においては大小の土坑や柱穴が密集した状態が検出された。また第4次調査では、前年に検出された大溝の延長に想定される場所で新たに大溝が確認され、環濠集落として確実視されることになった。1987年の工場増築に伴う発掘調査では3条の環濠とさらに外側に3条の大溝が検出され、その環濠の一部に柵（杭列）のあることがわかった。さらに1989年の第14次調査でも3条の環濠が検出され、大量の土器や石器とともに木製の戈の柄が発見された。

転機となったのは、1994年に行なわれた現下之郷町里中道における下水道工事の立会調査である。この調査は、地下約2mに下水管を埋設する際に遺構を確認していくものであったが、これまで把握されていなかった環濠集落の北側環濠の位置を確認することができた。その結果3条環濠がめぐらされた範囲は南北径で260mとおさえられることとなった。1996年に行なった23次調査では、3条の環濠が検出されその最も内側の環濠から埋立て造られた集落の出入口が発見された。出入口は、柵や門で堅固に護られていて周辺から銅剣や磨製石剣、弓、石鏃などが多数出土し、弥生時代の戦いの痕跡を如実に語る場所として評価された。ここまでの調査で環濠集落の範囲がおおよそ推定されるようになったが、北東側の環濠周回位置については判然としていなかった。それは、1993年に実施した隣接する酒寺遺跡の発掘調査で下之郷遺跡に近い位置で、幅4m前後の溝が複数並行する状態で検出されていたが、下之郷遺跡で検出されていた本来の3条の環濠のあり方ではなかったため（幅3～4m、深さ1.5m前後）、やはり下之郷遺跡の環濠であることの判断は保留せざるを得なかったからである。

その後、1998年の第25次調査で本来の3条の外側にさらに3条の大溝が見つかったことで、遺跡の東側には3条の外側にさらに複数の環濠が掘削されていることが確実となった。酒寺遺跡の調査で検出されていた大溝が第25次調査の溝に繋がることが判明し、結果的に遺跡の東側には8～9条の環濠が掘られていることがわかった。この成果から第9次調査の外側の3条の溝も環濠と理解することが可能となった。環濠内部の調査は、これまで小面積を点的に行なってきたが、27次調査では中央部を面的に広げることとなった。検出された遺構には井戸や土坑、壁立式建物、区画溝が密集する状態で検出されたが、なかでも集落中央部で見つかった南北に延びる区画溝は集落の中核施設を取り囲む方形区画の一種と考えられ、その後の確認調査の重要課題となっている。

重要遺跡範囲確認調査は、この25、27次の調査と史跡化への取組みを契機にして周辺の遺構分布と環濠集落域の把握を目的に平成10年度から実施していくこととなった。29次、31次調査と平成11年度に実施した34次、35次、37次、39次の確認調査は下之郷遺跡の東側環濠の位置を把握することに目的がおかれ、3条環濠の周回する推定ラインがおさえられた。国の史跡指定は、これら確認調査成果をもとに下之郷町土地権利者への説明会を繰り返し、平成13年度より指定同意取得に入り、同年8月に指定申請、翌年3月に国指定遺跡として官報告示がおこなわれた。その後も遺跡内外で範囲確認調査を進めていくこととなっているが、大きくわけると2つの調査成果が挙げられる。

表1 下之郷遺跡調査年譜

調査次数	調査年	種類	調査原因	調査地番	調査(開発)面積	概略および備考	
1	1980	S55	立会	下水道	北黒田	—	3か所中2か所が下之郷遺跡範囲内
2	1982	S57	立会	下水道	曾々井	—	調査時は吉身西遺跡
3	1983	S58	本掘	都市計画道路	南黒田	約 2160 m ²	3条の環濠、調査時は吉身西遺跡
4	1984	S59	本掘・確認	個人住宅	平川端 707-1	(500 m ²)	3条の環濠
5	1984	S59	本掘	個人住宅	井上 631-4	(455 m ²)	
酒寺遺跡で調査	1985	S60	本掘	個人住宅	シノ 194-10	約 270 (330) m ²	溝・土坑・流路、下之郷遺跡範囲外
6	1986	S61	本掘	個人住宅	井上	(250 m ²)	土坑・ピット
7	1986	S61	本掘	個人住宅	下鎌田 646-1	(370 m ²)	下之郷遺跡範囲外
7	1986	S61	本掘	個人住宅	下鎌田 646-3	(400 m ²)	下之郷遺跡範囲外
8	1985	S60	本掘	個人の車庫	北黒田	約 19(80 m ²) m ²	柱穴、溝 2 条
9	1987	S62 ~ 63	本掘	工場増設	上黒田 708	約 1,600 m ²	3条の環濠、溝、土坑、鳥形木製品
10	1987	S62	確認調査	個人住宅	シノ 198-4	559 m ²	
11	1987	S62	試掘・発掘	個人住宅拡張	金影 610-5	160(381) m ²	環濠
12	1987	S62	試掘・発掘	店舗	皆広	(230 m ²)	
13	1988	S63	本掘	個人用物置	橋本 615	(150 m ²)	溝
酒寺遺跡で調査	1988	S63	本掘	個人住宅	シノ 192-4	(797 m ²)	下之郷遺跡範囲外
14	1989	H元 ~ 2	本掘	事務所・控室	上黒田	約 400 m ²	3条の環濠、溝、土坑、戈の柄
15	1989	H元	本掘	農用倉庫建築	井上 631-5	298 m ²	土坑、溝、掘立柱建物
16	1991	H3	立会・本掘	店舗用駐車場	井上 635-6	(165 m ²)	溝、土坑、柱穴
17	1992	H4	本掘	共同住宅	金影 611- 1 他		溝
18	1992	H4	本掘	事務所建築	見田 210-2	約 100 m ²	溝、土坑、柱穴
19	1993	H5	立会	公共下水道	橋本	1,450 m ²	環濠、土坑、柱穴
20	1994	H6	本掘	倉庫建築	北黒田 673-6	約 30(363) m ²	土坑、柱穴
21	1994	H6	立会	公共下水道	幸徳庵 325 他	2,040 m ²	北側の環濠 3 条
酒寺遺跡で調査	1995	H7	本掘	個人住宅	シノ	約 900 m ²	下之郷遺跡範囲外
吉身西 71 次	1996	H8	本掘	共同住宅	下鎌田 647 他	約 230 m ²	下之郷遺跡範囲外
22	1996	H8	本掘	共同住宅	皆広	約 300 m ²	調査時は吉身西遺跡 72 次
23	1996	H8	本掘	宅地造成	橋本	約 1,200 m ²	3条の環濠と建物群、銅剣
24	1997	H9	本掘	農用倉庫	見田	110 m ²	溝、土坑、柱穴
25	1997	H9	本掘	道路側溝	北黒田	14 m ²	土坑、柱穴
25	1997	H9	本掘	都市計画道路	見田	約 2,300 m ²	6条の環濠、壁立式建物、木偶
26	1998	H10	立会	下水道工事	北黒田	—	環濠
27	1998	H10	本掘	都市計画道路	北黒田 671-7	1,800 m ²	区画溝
28	1998	H10	平面調査	確認調査(重)	北黒田 676	40 m ²	「2004 報告書」
29	1998	H10	平面調査	店舗	見田 210-1	1,241 m ²	3条の環濠と盾 「2004 報告書」
30	1998	H10	平面調査	個人住宅	橋本 622	約 457 m ²	環濠
31	1998	H10	平面調査	確認調査(重)	見田 215-1	1,157 m ²	高床建物と壁立式建物 「2004 報告書」
32	1998	H10	平面調査	個人住宅	北黒田 634-1	590 m ²	1条の環濠と壁立式建物 「2004 報告書」
33	1999	H11	平面調査	共同住宅	皆広 640-37	850 m ²	5条の環濠 「2005 報告書」
34	1999	H11	平面調査	確認調査(重)	シノ 204-1	400 m ²	4条の環濠 *本書に報告
35	1999	H11	平面調査	駐車場	見田 217 他	500 m ²	2条の環濠 *本書に報告
36	1999	H11	平面調査	店舗建築	見田 218-1・2	250 m ²	2条の環濠 *本書に報告
37	1999	H11	平面調査	確認調査(重)	シノ 202-1	500 m ²	2条の環濠 *本書に報告
38	1999	H11	平面調査	個人住宅	北黒田 676-1	477 m ²	溝、柱穴 *本書に報告
39	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	平川端 705-1	400 m ²	2条の環濠 *本書に報告
40	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	井上 635-1	250 m ²	溝、柱穴 *本書に報告
41	2000	H12	平面調査	個人住宅(立)	幸徳庵 240	10 m ²	環濠 *本書に報告
42	2000	H12	本掘・平面	宅地造成	上門田 539-1	3,986 m ²	外周環濠の一部 *本書に報告
43	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	橋本 615-3, 2	60 m ²	環濠 *本書に報告
44	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	井上 632	600 m ²	区画溝、大型掘立柱建物
45	2001	H13	平面調査	共同住宅	北黒田 676-2, 5	580 m ²	区画溝、井戸
46	2001	H13	本掘・平面	宅地造成	久戸 504-1	1,900 m ²	外周環濠、壁立式住居
47	2001	H13	平面調査	共同住宅	上門田 544-1	約 951 m ²	外周環濠の一部
48	2001	H13	平面調査	共同住宅	上門田 543-1	991 m ²	外周環濠の一部
49	2002	H14	平面調査	共同住宅	久戸 507-1.4	約 982 m ²	外周環濠の一部
50	2002	H14	平面調査	確認調査	久戸 290	約 20 m ²	
51	2002	H14	平面調査	確認調査	皆広	174 m ²	集落内、井戸
52	2003	H15	本掘・平面	共同住宅	上門田 546-1	1090 m ²	方形周溝墓
53	2003	H15	平面調査	確認調査	皆広 643-1	約 1000 m ²	環濠の一部
54	2003	H15	平面調査	確認調査	皆広 640-1	約 400 m ²	環濠の一部
55	2004	H16	平面調査	確認調査	井上 631-2	約 700 m ²	建物、区画溝
56	2005	H17	平面調査	個人住宅	金影 610	354 m ²	環濠 3 条
57	2005	H17	平面調査	確認調査	見田	約 400 m ²	環濠の一部
58	2005	H17	平面調査	確認調査	井上 633	約 1,000 m ²	建物、区画溝



図2 下之郷遺跡全体図

一つは、集落内部で区画溝と大型建物が確認されたこと。もう一つは、集落の西側で3条環濠の外方でさらに居住区と環濠が検出されたことである。前者については、平成10年度に実施した32次調査で南北と東西に伸びる区画溝と壁立式平地住居が検出され、平成13年度に実施した44次調査では床面積が55㎡を超える独立棟持柱付大型建物が発見されるとともに東西に伸びる区画溝が確認された。大型建物の集落内での位置づけは「首長が儀式やまつりをおこなう場所」「集会所」「ムラ全体の共同倉庫」などの意見が出ているが、今後周辺の調査が進む中で検討されるべき課題といえよう。後者については、平成12年度の確認調査(42次)でこれまで弥生時代の遺構がないと考えられていた地点で環濠や住居、井戸跡などが検出された。さらに46次調査では、これまでの西側3重環濠の外側約250mの地点で2条の環濠と内側で井戸や壁立式建物が発見され、3条環濠の外側にも居住域が設けられていることが判明した。そして、平成13年度に実施した47・48次調査でも環濠の一部や通路などが確認されている。これらの3重環濠より外側の環濠については、外周環濠=すなわち3重環濠帯を「内濠」と呼称するのに対し「外濠」という用語を使用し、同心円状に二重構造になっている可能性が指摘できる。しかし、東側に立地する3重環濠に対し、別個の居住空間を想定し分岐して囲んだ集落域とみる考え方も現状では考慮しておく必要がある。これまでの調査成果をもとに遺跡全体の規模を考えると、東端から西端までの距離は約670m、南北が約460mで面積はおおよそ25haにもおよぶことが推定されるようになってきている。

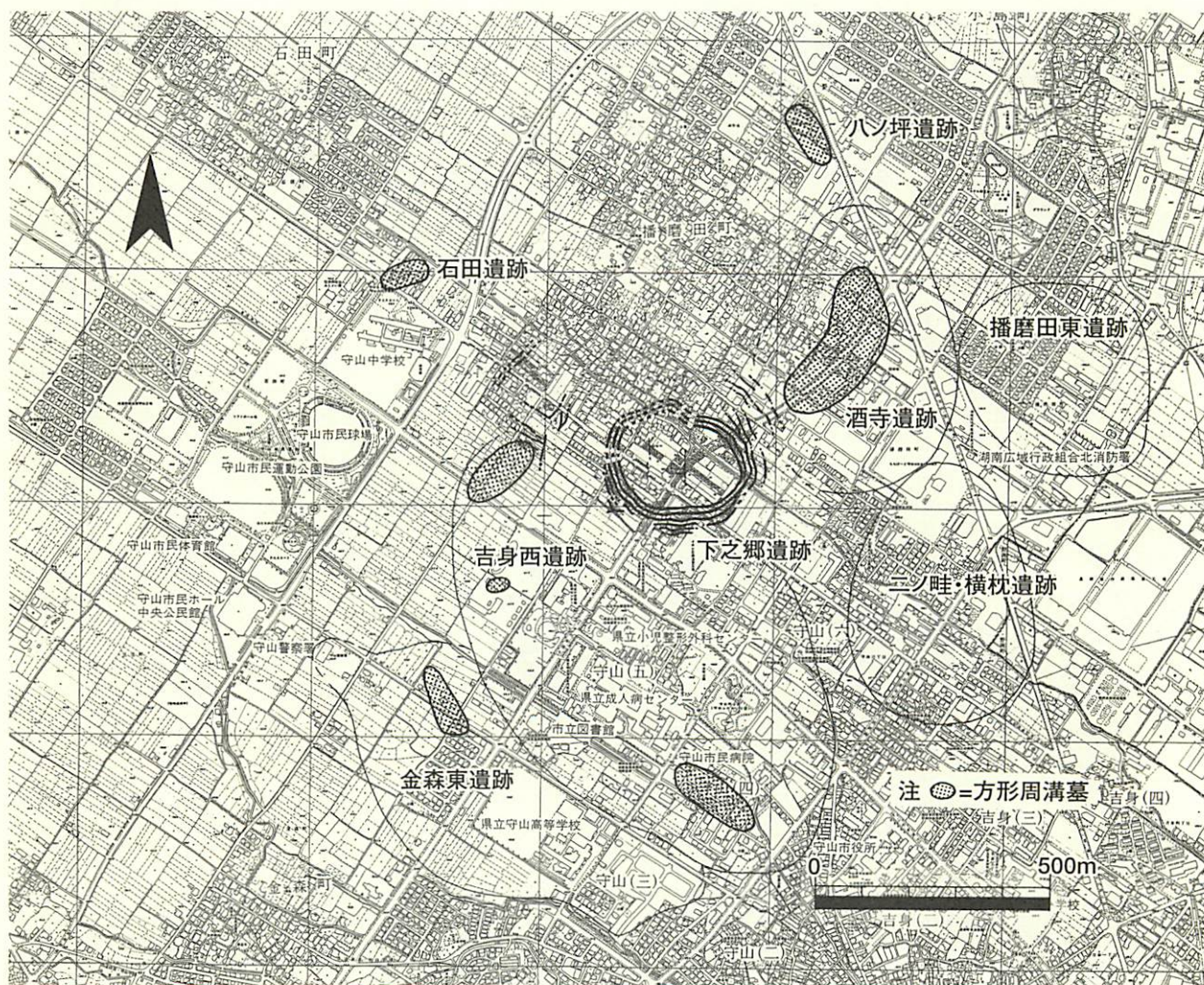


図3 下之郷遺跡と周辺遺跡 (下之郷遺跡の環境と墓の位置)

Ⅱ 調査成果

1. 第34次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町字シノ 204-1 番地
- (2) 調査期間 平成11年8月4日～同年9月4日
- (3) 調査面積 400 m²
- (4) 担当者 川畑和弘

(5) 調査経緯と方法

34次の調査地は、弥生時代中期の環濠集落の東端部分にあたる。調査の目的は、集落外縁のどの位置に環濠が掘られているか、その条数や周辺遺構の分布状況を把握するために確認調査を実施した。調査は、重機にて表土（耕作土約20cm）を除去したのち、人力と重機を併用して、その下にある淡灰白色土（床土約5cm）を除き、淡灰黄色土で遺構を検出した。今回の調査では、遺構の把握を主眼としたため、断割り調査は実施せず、記録を取った後は、埋め戻し原状復旧を行った。

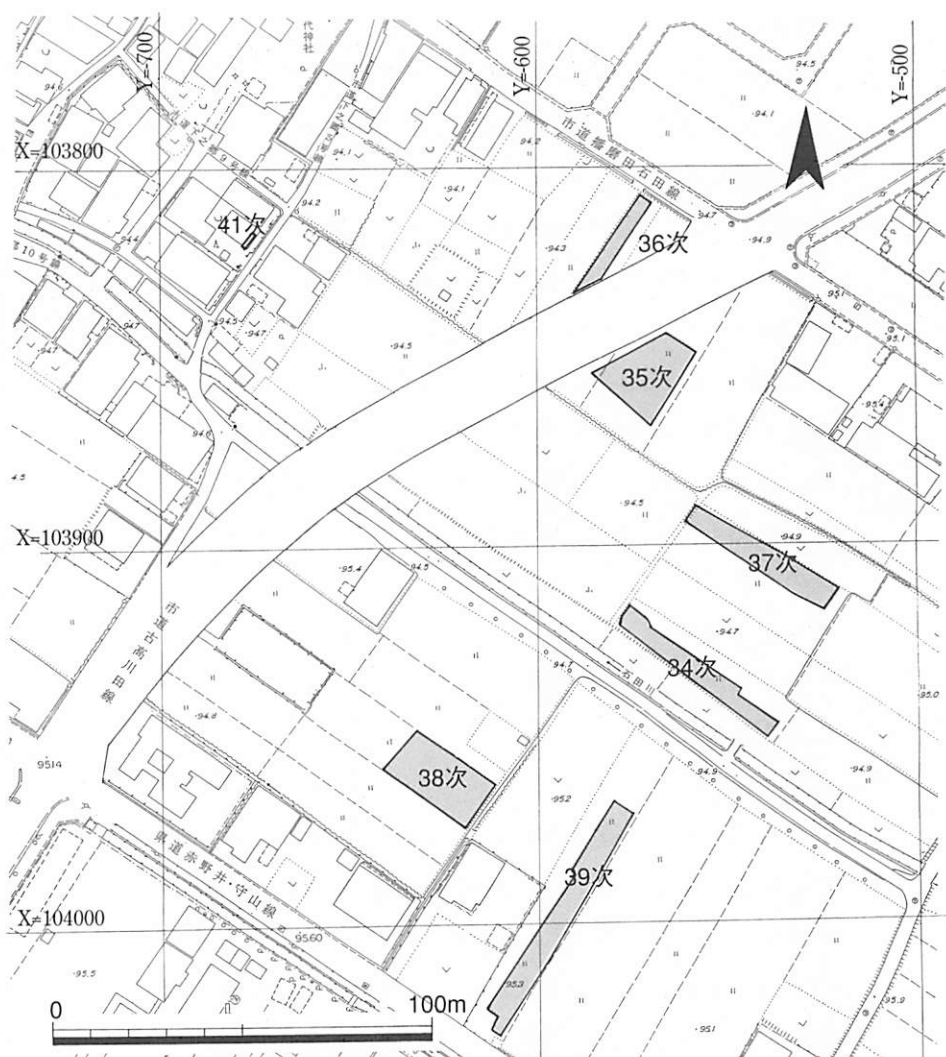


図4 第34・35・36・37・38・39・41次調査位置図

(6) 検出遺構

遺構は、環濠、溝、ピットなどが確認された。

SD-3401（第1環濠）

SD-1は、集落を周回する環濠の中でも最も内側に位置するものと考えられる。幅は、調査区に限られていて全幅は不明であるが、6mを超えるものである。29・31次調査（平成10年度調査）で検出された環濠の延長に位置するものと考えられる。時期は、弥生時代中期後葉と推定される。

SD-3401a

SD-3401aは、SD-3401とSD-3402の間を取り結ぶように掘られた小溝で、幅約1mと約3mの2

条が確認できる。

SD-3401b

SD-3401b は SD-3401 と SD-3402 の間に掘られた幅約 1 m の小溝で、SD-3402 に沿って延びている。

SD-3402

SD-3402 は、集落を周回する 3 条の環濠の中で、内側より 2 本目の環濠の可能性があり。幅は約 4 m を計り南北方向に延びる。時期は弥生時代中期後葉と推定される。

SD-3403

SD-3403 は、幅約 4 m を測る大溝で、環濠の可能性があり。時期は弥生時代中期後葉と推定される。

SD-3404

SD-3404 は、幅約 5 m を測る大溝で、環濠の可能性があり。時期は弥生時代中期後葉と推定される。

SX-3401

SX-3401 は、SD-3403 と SD-3404 を切り込むように掘られており、それらより後出のものと考えられる。全形は、調査区に限られ判然としないが、方形周溝墓の可能性があり。溝幅は 1 m 前後で、「コ」の字状に折れ調査区の南側に広がる。

(7) 出土遺物

遺構検出作業中に土器片の出土はあったものの、図示に足るものはなかった。

(8) 小結

今回検出された遺構の中で SD-3401 の外縁に沿ってと、SD-3402 の外縁部分には、直径約 10 cm 程度の小ピットが連なって多数検出されている。これらの小ピットについては、木杭や柱穴など人為によるものか、樹根など自然の営為によるものか判然としないが、前者の可能性が高い。今後の調査で機能等の手がかりを明らかにしていきたい。

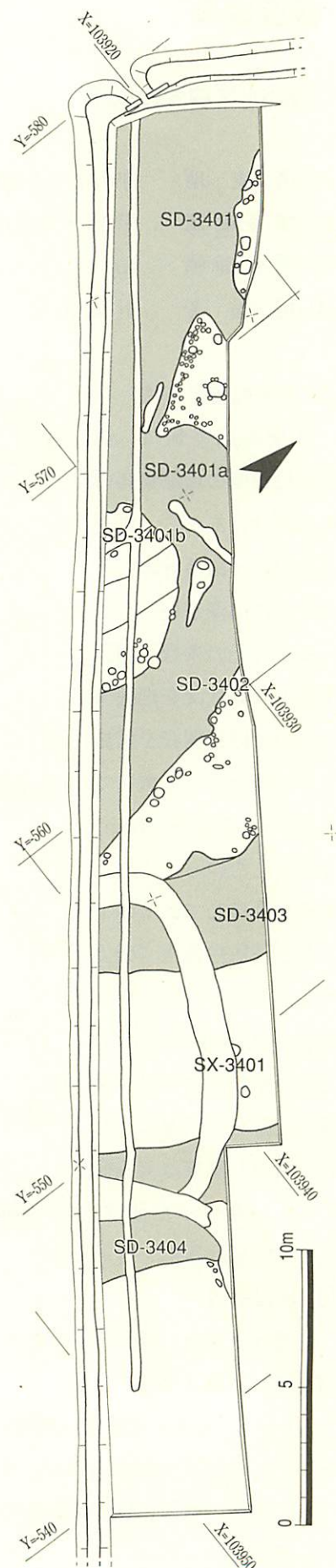


図5 第34次調査全体図

2. 第35次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町字見田217番地他
- (2) 調査期間 平成11年10月4日 ～ 同年10月8日
- (3) 調査面積 500 m²
- (4) 担当者 川畑和弘

(5) 調査経緯と方法

今回の調査地は、弥生時代中期の環濠集落の東北端部分にあたる（図4）。調査の目的は、集落外周のどの位置に環濠が掘られているか、その条数や周辺遺構の分布状況を把握するために確認調査を実施した。調査は、重機にて表土（耕作土約20cm）を除去したのち人力と重機を併用して、淡灰黄色小礫まじり砂質土で遺構を検出した。今回の調査では遺構の把握を主眼としたため、一部を平面プラン確認の後断割りした他は、遺構の掘削調査は実施せず、記録を取った後は、埋め戻し現状復旧をした。

(6) 検出遺構

遺構は、大溝2条と近世以降の溝1条が確認された。

SD-3501（第3環濠）

SD-3501は、幅約6mを測る。集落を周回する環濠の中で内側より3番目の環濠の可能性がある。時期は弥生時代中期後葉。

SD-3502（環濠）

SD-3502は、幅4mを超える大溝で、内側から4本目の環濠にあたる可能性がある。時期は、弥生時代中期後葉。

SD-3503

SD-3503は、SD-3501とSD-3502を切り込んで掘られた溝で、灰黄色砂質土の埋積土である。幅は、約3mを測る。時代は、江戸時代以降のものと考えられる。



図6 第35次調査全体平面図

3. 第36次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町字見田 218-1、218-2 番地
(2) 調査期間 平成 11 年 11 月 24 日～同年 11 月 30 日
(3) 調査面積 250 m²
(4) 担当者 川畑和弘

(5) 調査経緯と方法

今回の調査地は、弥生時代中期の環濠集落の東北端部分にあたる。調査の目的は、集落の外周の環濠の位置を把握することである。調査は、重機にて表土（耕作土約 25cm）を除去したのち人力と重機を併用して、その下にある淡灰白色土（床土約 5cm）を除き、灰黄色土での遺構を検出した。今回の調査では、遺構の把握を主眼としたため、断割り調査は実施せず、記録を取った後は、埋め戻し原状復旧をした。

(6) 検出遺構

遺構は、大溝 3 条を確認した。

SD-3601

SD-3601 は、幅約 3 m を測る大溝で、集落の縁に掘られた 3 条の環濠のさらに外側に掘られた大溝にあたるものと推測される。

SD-3602

SD-3602 は、幅約 7 m を超える大溝である。断ち割りや掘削調査を実施していないため判然としないが、2 条の大溝が合流、切り合いをもって埋もれた結果の状態と見ることもできる。検出面上には、灰色土によって埋まる小溝が 1 条が認められる。SD-3602 が完全に埋没した後のものである。

SD-3603

SD-3603 は、調査区に限られ全容は知れないが、幅 3 m を超える大溝の可能性が高い。集落の縁に掘られた 3 条の環濠のさらに外側に掘られた大溝にあたるものと推測される。

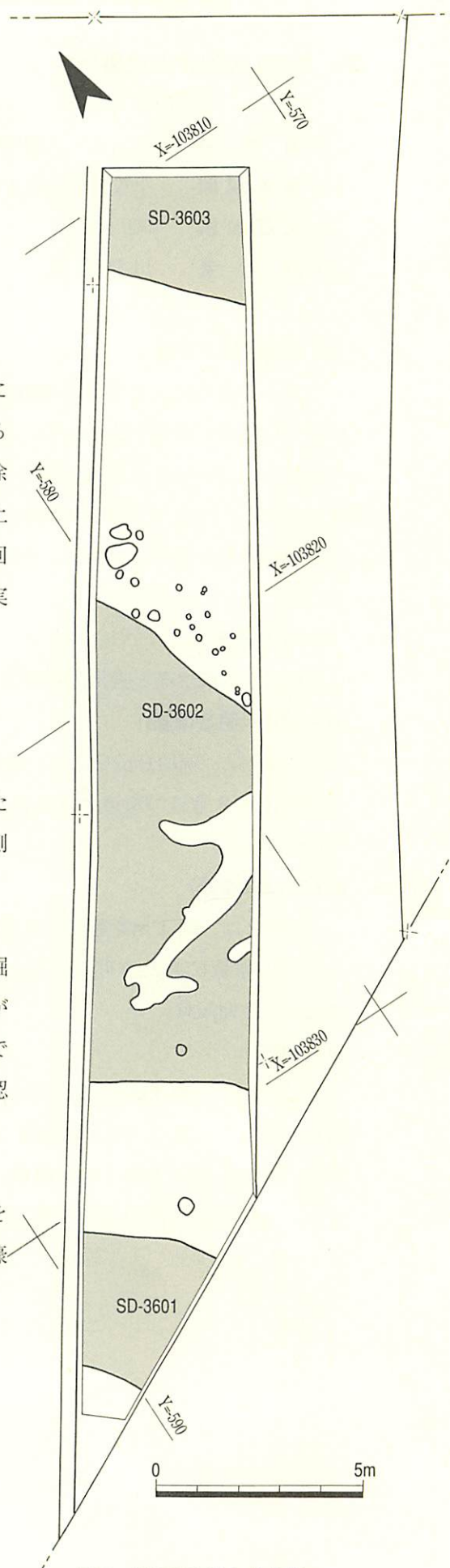


図7 第36次調査全体図

4. 第 37 次調査の成果

- (1) 調 査 地 守山市下之郷町字シノ 202-1 番地
(2) 調 査 期 間 平成 11 年 12 月 8 日 ~
平成 12 年 1 月 8 日
(3) 調 査 面 積 約 500 m²
(4) 担 当 者 川畑和弘

(5) 調査経緯と方法

第 37 次の調査は、弥生時代中期の環濠集落の東端部分にあたる。調査の目的は、集落の外周のどの位置に環濠が掘られているか、その条数や周辺遺構の分布状況を把握するために確認調査を実施した。調査は、まず重機にて表土（耕作土約 20 cm）を除去したのち人力と重機を併用して、その下にある淡灰白色土（床土約 5 cm）を除き、淡灰黄色土で遺構を検出した。今回の調査では、遺構の把握を主眼としたため、断割り調査は実施せず、記録を取った後は、埋め戻し原状復旧をした。

(6) 検出遺構

遺構は、大溝 2 条、溝、ピットなどが確認された。

SD-3701

SD-3701 は、幅約 4 m の大溝で、集落を周回する環濠の可能性がある。

SD-3702

SD-3702 は、幅約 2 m 程度の溝の可能性が高いが、調査地に限られ判然としない。

SD-3703

SD-3703 は、幅約 3 m の大溝で、集落の縁辺に設けられた 3 条の環濠のさらに外側の大溝の可能性がある。

SX-3701

SX-3701 は、直径約 3 m を図る不整形な土坑状遺構である。

SX-3702

SX-3702 は、直径約 1.5 m の円形をしており、土坑状遺構の可能性がある。

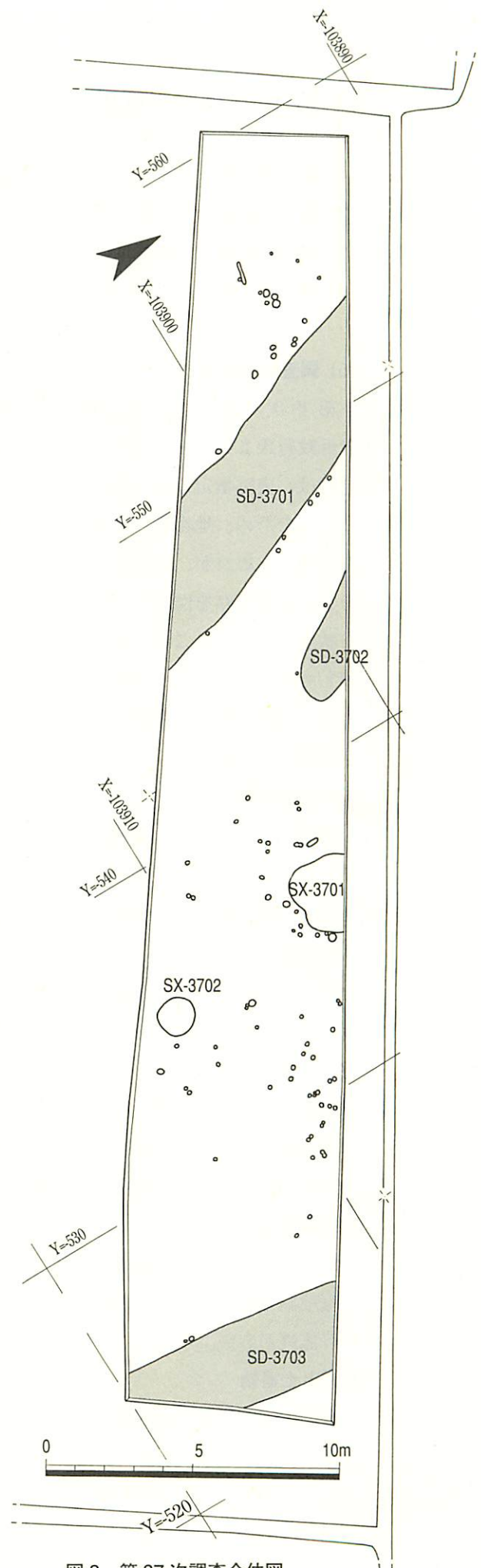


図 8 第 37 次調査全体図

5. 第38次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町字北黒田 676-1 番地
- (2) 調査期間 平成 11 年 12 月 20 日 ～ 同年 12 月 28 日
- (3) 調査面積 477 m²
- (4) 担当者 川畑和弘

(5) 調査経緯と方法

第 38 次の調査地は、環濠集落の内部の東南隅にあたる。平成 11 年 10 月 1 日に下之郷町に在住の北野政行氏より、個人住宅の建築に関する申し出、協議が教育委員会にあった。その時点での下之郷遺跡は、史跡指定以前の段階であった。建築計画では、基礎の根入れの深さが、遺跡検出面より下位にあったため、地権者、宅建業者と市生涯学習課文化財係は、代替地移転も視野に置いて幾度かの保存協議を進めたが、結果的には、現地の確認調査を実施することを前提とし、調査後に保存層（盛土）を入れ遺構保存を図るとともに、個人住宅建築を進めて頂くこととした。調査は、地下遺構の平面分布状態を把握することを目的に、重機にて表土（耕作土約 20cm）を除去したのち、人力と重機を併用して、その下にある淡灰白色土（床土約 5cm）を除き、淡灰黄色の遺構面を検出した。今回の調査では、遺構の把握を主眼としたため、断割り、掘削調査は実施せず、記録を取った後は、埋め戻し現状復旧をした。

(6) 検出遺構

耕土、床土の直下の遺構検出面全域には、幅約 20 cm の鋤取り溝がストライプ状に確認できる。充填した土質は灰白色砂質土で、近世以降に掘られたものと考えられる。遺構の密集度は非常に高く、溝、土坑状遺構、柱穴などが検出された。

SX-3801

SX-3801 は、調査区東端で検出された円形遺構で、直径約 10 m を測る。掘削調査をしていないため遺構の種類は不明であるが、竪穴住居の可能性もある。南側には 2 条、西側には 1 条の小溝（幅約 20 cm）が確認できる。

SX-3802

SX-3802 は、調査区南西端で検出された溝状の遺構で、円弧状をなす。幅約 4 m を測り、南西側や北東側に枝分れした小溝を持つ。掘削調査をしていないため遺構の種類は不明である。

SD-3801

SD-3801 は、調査区東端で検出された溝で幅約 1.5m を測り、南西から北東に延びている。

掘削調査をしていないため深さなどは把握していない。灰色砂質土により埋積しており、中世以降の可能性が高い。

(7) 出土遺物

今回の調査では、掘削調査を行っていないものの、検出面や一部擁壁立会調査の際に遺物を採取した。

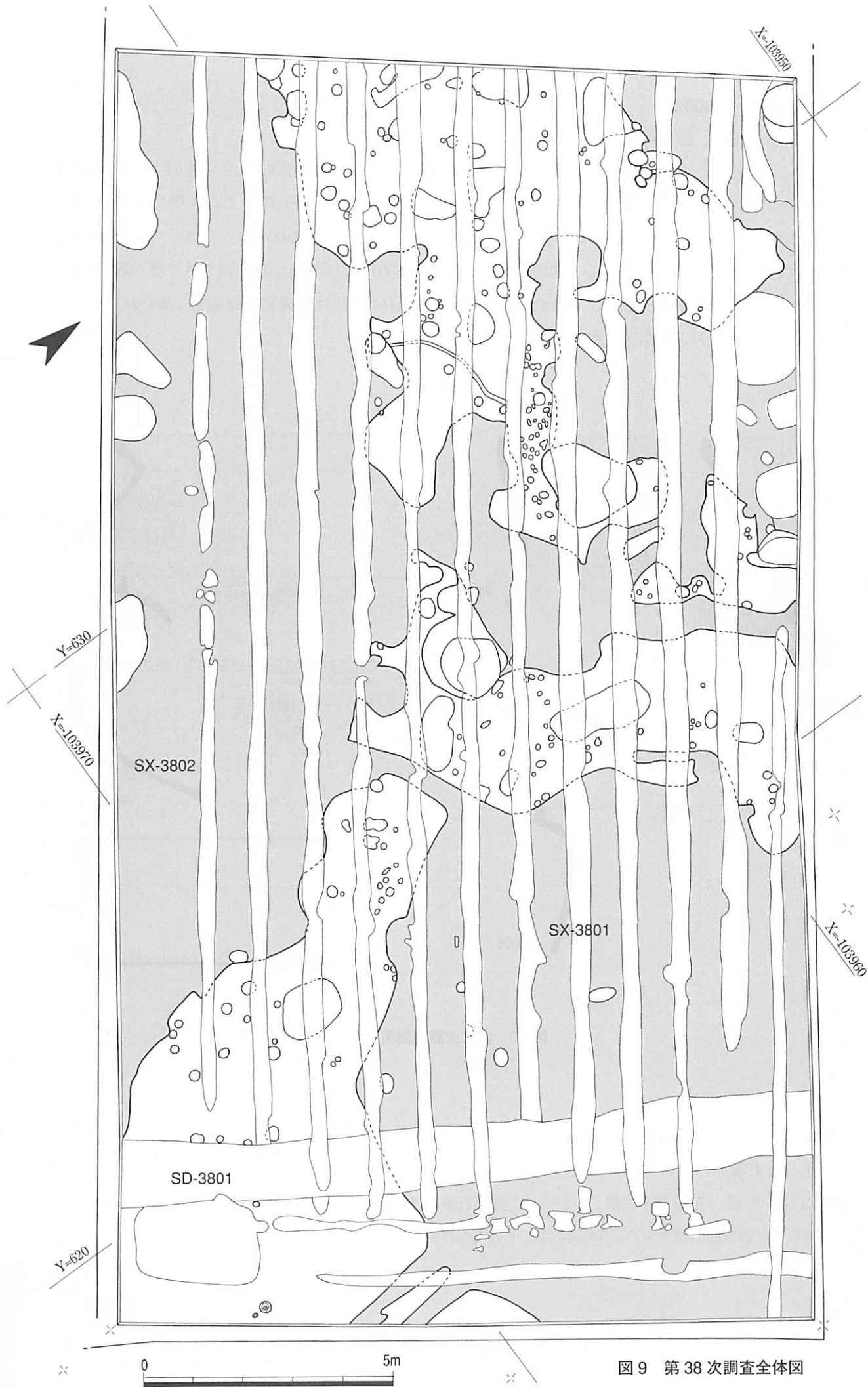


図9 第38次調査全体図

土器 (38001 ~ 38009)

土器については、図示可能な弥生土器9点を提示しておく。

38001、38002は、細頸壺の口頸部で、ともに口縁端部をやや内傾気味に立ち上げ終えるもの。38002については、摩滅が著しいが頸部から口縁にかけて全面に櫛状工具による刺突文を廻らしている。38003は、第2口縁部を垂直に立上げる有段口縁壺の口縁部。38004は、在地系の壺。38005、38006は、短く第2口縁を立上げる在地の受口状口縁甕。38007は、「く」の字状口縁を持つ甕。38008は、受部から口縁にかけて丸みを帯びて緩やかに立ち上がる高坏。口縁は凹線文や列点文で飾られている。38009は、台付鉢の口縁部の可能性がある。

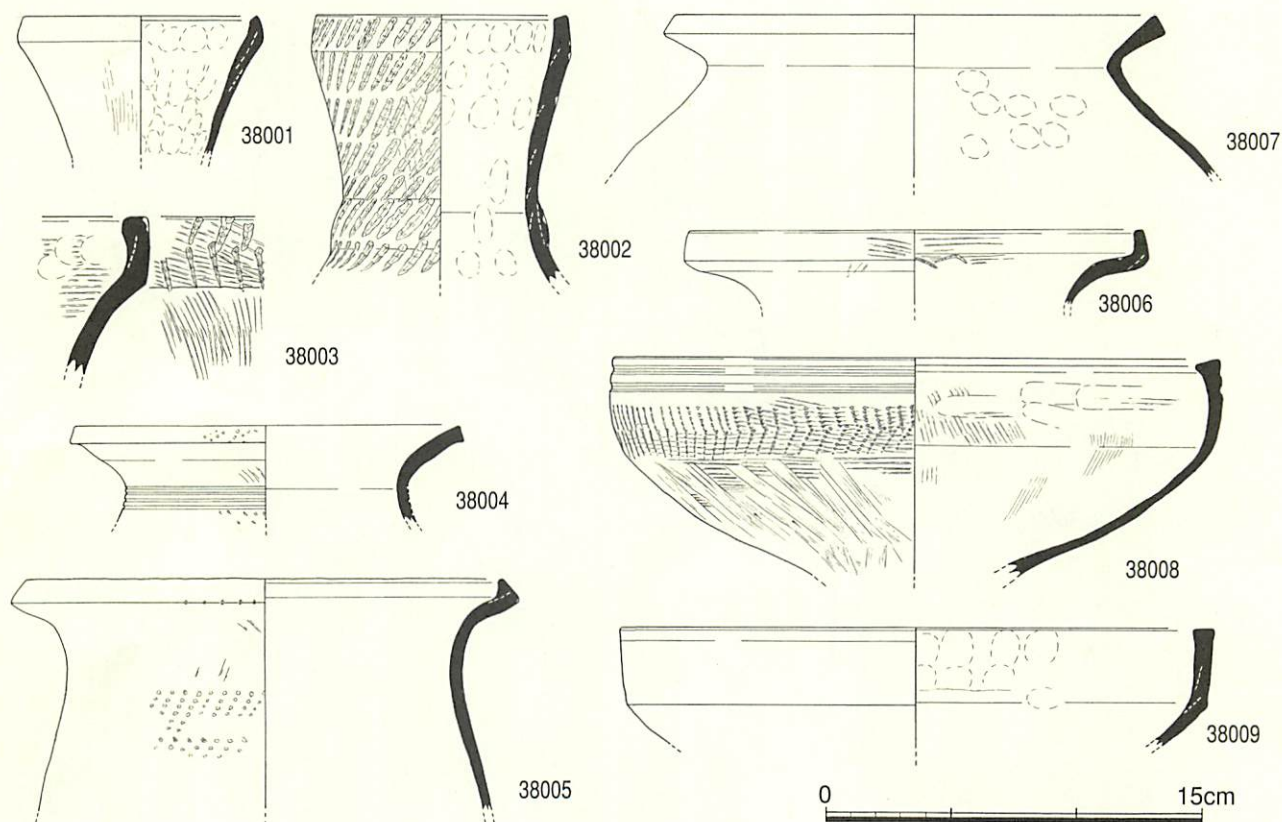


図 10 出土土器実測図

石製品 (38001s ~ 38004s)

出土した石製品について、実測したものは4点を数える。38001sは、両側縁に階段状剥離を残す石器。38002sは、両端（先端）を欠損しているが、磨製石錐の可能性はある。38003sは、打製の石錐で、錐部は短いが頭部との境が明瞭なもの。38004sは、平基式の打製石鏃。

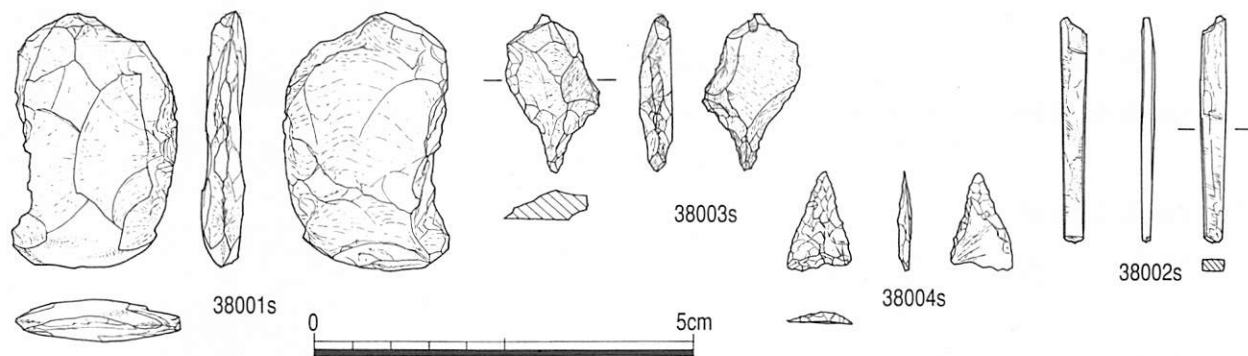


図 11 出土石製品実測図

表 2 出土土器観察表 (第 38 次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徴	手法的特徴	色調 / 胎土 / 焼成	備考
38001 図 10 図版十四	細頸壺	擁壁部	検出面	上面	口径：9.3cm 残存高：5.6cm	外傾して立ち上がる第 1 口縁の先端を内傾気味に仕上げる。	口縁部外面は縦ハケした後、口縁端部のみ横ナデ仕上げ。内面には、指オサエが見られる。	色調：5YR8/4 胎土：1mm 大の石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部 1/4 弱
38002 図 10 図版十四	細頸壺	擁壁部	検出面	上面	口径：10.0cm 残存高：10.7cm	外傾して立ち上がる第 1 口縁の先端を内傾気味に仕上げる。端部には面を残す。頸部に 1 条の貼付け凸帯文を付す。	口頸部外面はナデ消した上に、櫛状工具によって斜位に 7 段連続して刻み目を施している。	色調：(内)10YR 7/1 (外)7.5YR/2 胎土：1mm 大の石粒を含む 焼成：良好	頸部～口縁部 1/2
38003 図 10 図版十四	壺	擁壁部	検出面	上面	残存高：6.3cm	外反する第 1 口縁の上に、ほぼ垂直に第 2 口縁を立上げる。口縁端面は水平に仕上げる。	口頸部外面は縦ハケ。第 2 口縁部は斜ハケの後に櫛状工具によって斜位に 2 段の刻み目を施している。	色調：(外)7.5YR/2 胎土：1.5mm 大の石粒を含む 焼成：良好	口縁部のみ若干残存
38004 図 10 図版十四	壺	擁壁部	検出面	上面	口径：15.4cm 残存高：3.8cm	やや外反して短く立ち上る口縁部。口縁端部に面を残す。	外面に斜ハケを重ね、その後頸部に櫛状工具による右より列点文と直線文を入れる。口縁端面には列点文を施す。口縁内面にも櫛状工具で列点文を施す。	色調：7.5YR6/2 胎土：微石粒を含む 焼成：良好	頸部～口縁部 1/4
38005 図 10 図版十四	甕	擁壁部	検出面	上面	口径：19.0cm 残存高：9.2cm	緩やかに外反して立ち上がる第 1 口縁の先端を短く内傾気味に仕上げる。	外面に斜位ハケを重ね、頸部には櫛状工具で右より列点文を施す。第 2 口縁の上、下端に刻み目を施す。第 1 口縁内面には横位ハケを施している。	色調：10YR7/2 胎土：微石粒を多く含む 焼成：良好	肩部～口縁部 1/3
38006 図 10 図版十四	甕	擁壁部	検出面	上面	口径：19.0cm 残存高：9.3cm	緩やかに外反して立ち上がる第 2 口縁の先端を短く内傾気味に仕上げる。	第 2 口縁外面に斜位ハケを残す。第 1 口縁内面には、櫛状工具による波状文を施す。	色調：10YR7/2 胎土：微石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部 1/4
38007 図 10 図版十四	甕	擁壁部	検出面	上面	口径：19.0cm 残存高：6.5cm	屈曲して外反する「く」の字状口縁を持つ。口縁端部に面を作る。	頸部から体部中位にかけて指オサエの痕跡を残す。	色調：10YR8/1 胎土：1mm 大までの石粒を含む 焼成：良好	肩部～口縁部 1/4
38008 図 10 図版十四	高坏	擁壁部	検出面	上面	口径：24.0cm 残存高：8.7cm	緩やかに内傾気味に立ち上がる坏部で、端部に水平面を作る。	坏部外面は横位ハケを施した後、板状工具により縦位ナデを施す。坏部上端外面には 2 条の凹線文を施し、その下端に 2 段の列点文を施している。	色調：10YR7/3 胎土：1mm 大の石粒を少量含む 焼成：良好	坏部 1/4
38009 図 10 図版十四	台付鉢	擁壁部	SX-1	上面	口径：23.8cm 残存高：4.7cm	湾曲する受部に、ほぼ垂直に口縁部を立上げる。口縁端部は水平面をもつ。		色調：10YR8/2 胎土：1mm 大の石粒を含む 焼成：良好	坏部～口縁部 1/8

表 3 出土石製品観察表 (第 38 次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
38001s 図 11 図版十四	楔形石器	擁壁部	SX3801	上面	頁岩	66.9	40.2	8.2	38.4	4 辺の側縁ともに打撃による階段状の剥離痕が確認できる。一部には自然の稜面を留めている。
38002s 図 11 図版十四	磨製石器	擁壁部	SX3801	上面	頁岩	59.1	6.4	3.5	2.3	断面形状は長方形をしており、4 面ともに平滑に磨かれている。両先端はともに欠損している。
38003s 図 11 図版十四	石錐	擁壁部		検出面	ササカイト	41.3	24.8	8.2	7.3	錐部は長くないが、頭部との境が明確である。
38004s 図 11 図版十四	打製石錐	擁壁部		検出面	ササカイト	26.3	16.2	3.4	1.2	平基式の打製石錐

6. 第39次調査の成果

(1) 調査地 守山市下之郷町字平川端 705-1 番地

(2) 調査期間 平成12年1月31日 ～

同年2月29日

(3) 調査面積 400 m²

(4) 担当者 川畑和弘

(5) 調査経緯と方法

第39次の調査地は、環濠集落の東端部分にあたる。調査の目的は、集落の外周のどの位置に環濠が掘られているか、その条数や周辺遺構の分布状況を把握するために確認調査を実施した。調査は、重機にて表土（耕作土約20cm）を除去したのち人力と重機を併用して、その下にある淡灰白色土（床土約5cm）を除き、淡灰黄色土で遺構を検出した。今回の調査では、遺構の把握を主眼としたため、断割り調査は実施せず、記録を取った後は、埋め戻し原状復旧をした。

(6) 検出遺構

遺構は、環濠2条、ピットなどが確認された。

SD-3901（第3環濠）

SD-3901は、集落を周回する環濠の中で、内側から3条目にあたるものの可能性がある。幅は、調査区に限られていて全幅は不明である。第4次調査で検出されている環濠（SD-3903）の延長に位置するものと考えられる。

SD-3902（環濠）

SD-3902は、SD-3901の外側（東側）に掘られた大溝である。調査区に限られ全容は不明である。SD-3901とSD-3902の間には小溝によって取り結ばれたと考えられる場所が3箇所を確認された。

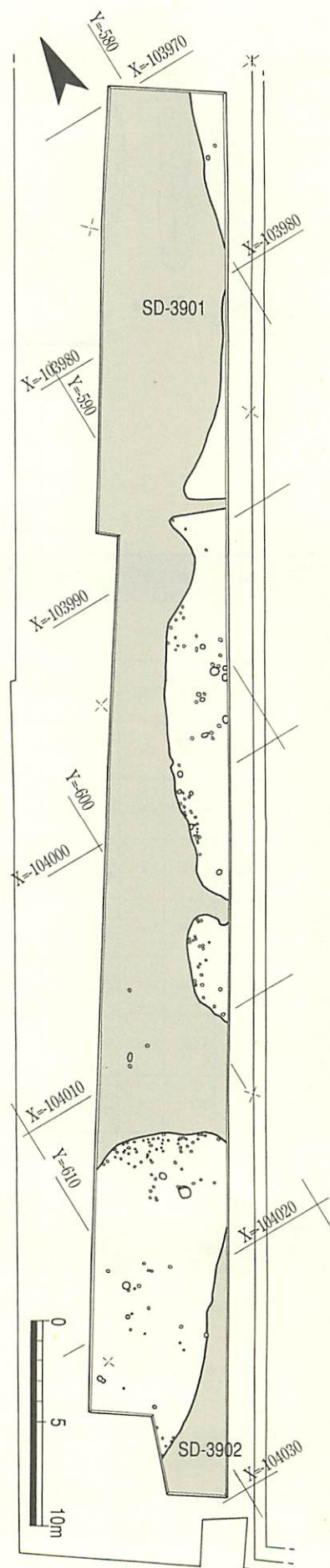


図12 第39次調査全体図

7. 第40次調査の成果

(1) 調査地 守山市下之郷町字井上 635-1 番地

(2) 調査期間 平成12年5月8日～

同年6月8日

(3) 調査面積 250 m²

(4) 担当者 川畑和弘

(5) 調査経緯と方法

第40次の調査地は、環濠集落の内部中央西よりの部分にあたる。調査の目的は、集落中央部の調査で検出されている区画溝（第27・32次調査）との関連で、周辺に中心区画（方形区画）とも言われる集落内部の区画溝の存否と遺構の分布状況を把握するために確認調査を実施した。調査は、重機にて表土（耕作土約20cm）を除去したのち人力と重機を併用して、その下にある淡灰白色土（床土約5cm）を除き、淡灰黄色土で遺構を検出した。今回の調査では、遺構の把握を主眼としたため掘削調査は行わず、一部断割りを実施し、記録を取った後は埋め戻し原状復旧をした。

(6) 検出遺構

遺構は、溝、柱穴などが密集する状態で検出された。

SD-4001

SD-4001は、調査区の西端で検出された溝状遺構で、幅約30cmを測り、南北方向に延びる。

SD-4002

SD-4002は、溝がL字状に折れ曲がるもので、幅約60cmを測る。区画溝の可能性がある。

SD-4003

SD-4003は、調査区の中央で検出された溝状遺構で、幅約120cmを測り、南－北東方向にわん曲して延びる。

SD-4004

SD-4004は、調査区の中央で検出された溝状遺構で、幅約3mを測る。西－北東方向にわん曲して延びる。

SD-4005

SD-4005は、調査区の東端で検出された溝状遺構で、幅約3mを測り、南西－北東方向に延びる。深さは約60cmを測る。

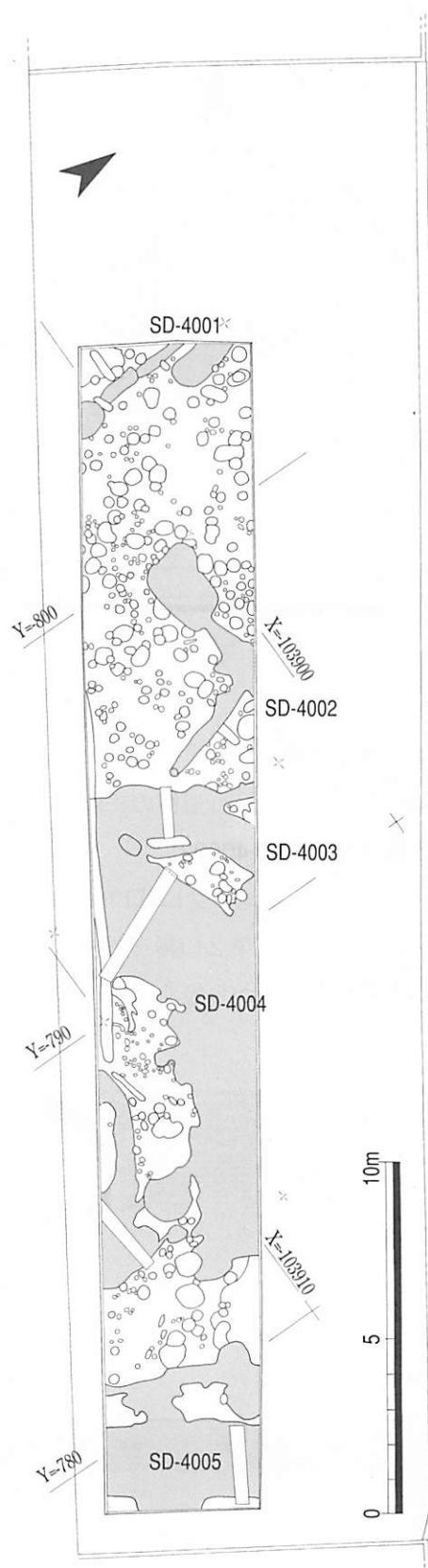


図13 第40次調査全体図

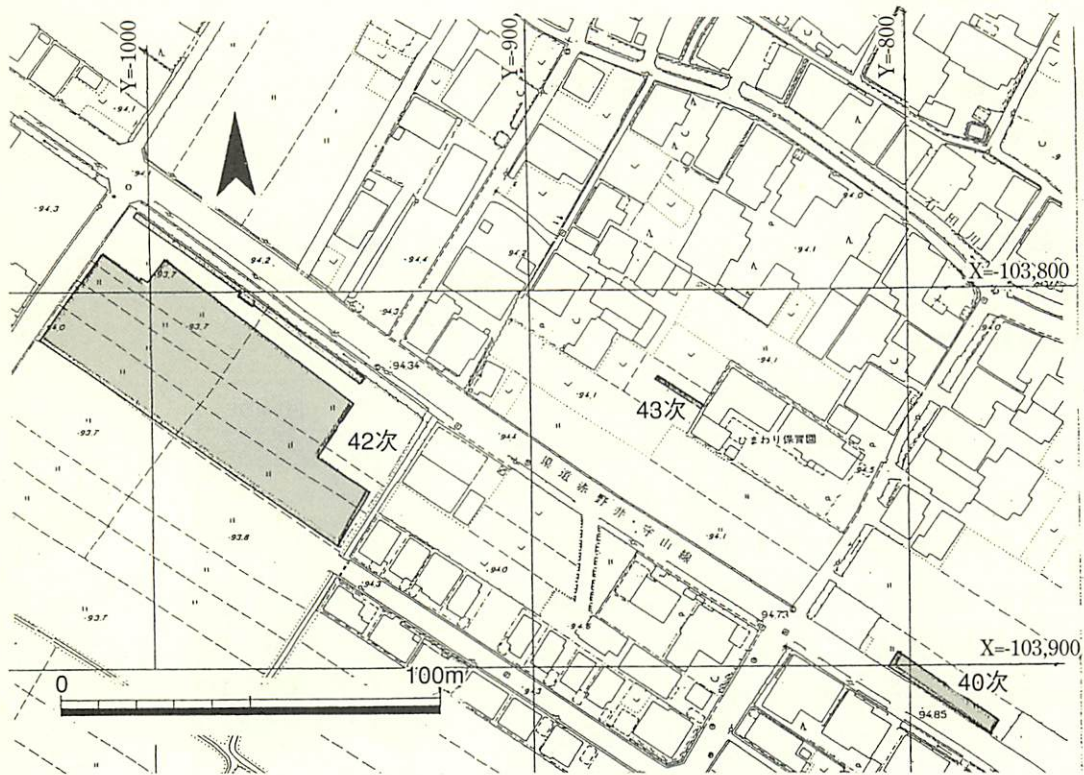


図 14 第 40・42・43 次調査位置図

(7) 出土遺物

今回の調査では、遺構の一部断割り調査で弥生土器の出土をみた。

土器 (40001 ~ 40003)

40001 は、在地の受口状口縁甕。第 2 口縁外面は斜ハケとする。40002 は、緩やかに外反する第 1 口縁の先端から第 2 口縁を外方に引き出す。第 2 口縁の外面には列点文が確認できる。40003 は、外反する第 1 口縁から短く上方に第 2 口縁をつまみ出す。

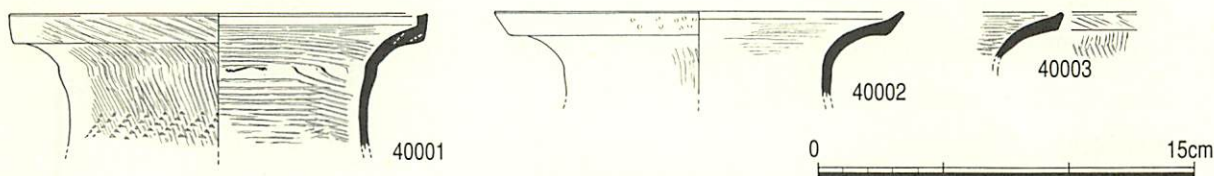


図 15 出土土器実測図

表 4 出土土器観察表 (第 40 次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徴	手法的特徴	色調 / 胎土 / 焼成	備考
40001 図 15 図版十五	甕	TA(1)	SD-4003	上層	口径: 16.8cm 残存高: 4.8cm	外反する第 1 口縁の上に、ほぼ垂直に第 2 口縁を立上げる。口縁端面は、ほぼ水平に仕上げる。	口頭部外面は縦ハケ。第 2 口縁部は斜ハケで終える。	色調: 5YR8/4 胎土: 1mm 大の石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部 1/6 弱
40002 図 15 図版十五	甕	TA(1)	SD-4005		口径: 16.4cm 残存高: 2.8cm	緩やかに外反して立ち上がる第 1 口縁の先端から第 2 口縁を外方に引き出す。	口頭部外面は縦ハケ。第 2 口縁内面には、荒い横位ハケを施す。第 2 口縁外面には、櫛状工具による列点文を施す。	色調: (内) 10YR 7/1 (外) 7.5YR/2 胎土: 1mm 大の石粒を含む 焼成: 良好	頸部~口縁部 1/6
40003 図 15 図版十五	甕	TA(1)	SD-4005		残存高: 2.3cm	外反する第 1 口縁の先端を短く上方につまみ出し第 2 口縁とする。	口頭部外面は縦ハケ。第 2 口縁外面は斜ハケを施している。	色調: (外) 7.5YR/2 胎土: 1.5mm 大の石粒を含む 焼成: 良好	口縁部のみ若干残存

8. 第41次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町字幸徳庵 240 番地
(2) 調査期間 平成 12 年 5 月 16 日
(3) 調査面積 10 m²
(4) 担当者 川畑和弘

(5) 調査経緯と方法

平成 12 年 3 月に下之郷町在住の林三代次氏より、個人住宅の増築計画の申請が上がった。基礎工法はベタ基礎で、下之郷遺跡の埋没深より浅いため遺構の損壊はないと判断されたが、集落域の北縁の環濠が周回する位置にあたるため、工事の際に一部開削をする立会い調査の実施に協力して頂いた。その結果、表土（造成土と旧耕土約 40cm）を除去した地点で淡黄灰色の遺構面が確認され、環濠の埋積土と思われる黒褐色土が検出された。今回の調査では、遺構の把握を主眼としたため、断割り調査は実施せず、記録を取った後は、埋め戻しをした。

(6) 検出遺構

遺構は、大溝の一部が確認された。

SD-4101（第2環濠）

SD-4101 は、集落を周回する環濠の中でも内側から 2 条目に当たる環濠と考えられる。幅は、調査区に限られていて、全幅は不明である。21 次調査（平成 6 年度実施）で検出された環濠の延長に位置するものと考えられる。



図 16 第 41 次調査全体図

9. 第42次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町字上門田 539-1 番地他
(2) 調査期間 平成12年6月12日 ～ 同年7月31日
(3) 調査面積 3,986 m²
(4) 担当者 川畑和弘

(5) 調査経緯と方法

民間の宅地造成工事に関連して試掘調査を実施した結果、弥生時代の遺構が広がっていることが確認されたため、造成地内の進入路と擁壁工事部分については原因者負担によって発掘調査を実施し、それ以外の対象地については開発者（株式会社北川建設）と協議し確認調査を実施した。調査は、重機にて表土（耕作土約20cm）を除去したのち人力と重機を併用して、その下にある淡灰白色土（床土約10cm）を除き、淡灰黄色土で遺構を検出した。今回の調査では、遺構を平面検出した後、進入路と擁壁部分について範囲を限定して本調査（掘削調査）を実施し、それ以外の場所については、平面検出で遺構の把握にあたった。調査終了後は遺構面上に山砂を保存層として敷き広げ、その上に旧耕作土を戻した。

(6) 検出遺構

遺構は、大溝や土坑、掘立柱建物、井戸、土坑、方形周溝墓などが検出された。

SD-4201

SD-4201は、幅3m、深さ約20cm、断面形状は緩やかなU字形を呈する溝で、SD-4201aとSD-4201bの2つの枝溝を持っている。時期は弥生時代中期後葉。

SD-4201a

SD-4201aは、幅約1.6mの溝。掘削調査をしていないため詳細は不明。

SD-4201b

SD-4201bは、幅約1.8m、深さ約40cm、掘削調査をしていないため詳細は不明。

SD-4202

SD-4202は、幅3.5m前後で、深さ約90cm、断面形状はU字形を呈している。SD-4203にほぼ直角に近い状態で取り付く。擁壁工事部分の調査地点の下層から板材（原木の縦割材）が出土している。

SD-4203

SD-4203は、幅約4m、深さ160cm前後、断面形状は、V字形に近いものである。上流から流れ来る自然流路状のものではなく南東の一端が調査地中央で途切れている。ただし、地下水位が高いためか湧水があり、調査中においても、放置しておけば水が溜まった状態となる。

SK-4201

SK-4201は、長径2.0m 深さ約10cmの浅い土坑。出土遺物は認められなかった。

SK-4202

SK-4202は、長径14m、短径4.6m、深さ約30cmの不整形な土坑状遺構で、床面で直径20cm程度の柱穴が8個以上検出された。北東に延びる柵（SA-4201）との関連が注目される。

SK-4203

SK-4203 は、長径 5.5m の土坑状遺構。未掘削のため詳細は不明である。

SA-4201

SA-4201 は、直径 10 ～ 40cm 程度の柱穴群で SK-4202 から北東に向けて並ぶ。柵の可能性はある。

SB-4201

SB-4201 は、長辺約 8 m、短辺 5.5m を測る隅丸長方形もしくは、直径 8m 程度の円形壁立式平地住居の可能性と建替えを考える。平面検出にとどめ掘削調査は行なっていないため、時期など詳細不明。

SB-4202

SB-4202 は、直径約 6 m 程度の円形壁立式平地住居の可能性が考えられる。

SE-4201

SE-4201 は、直径 1.5m、深さ 160cm を測る井戸で、下層から第Ⅳ様式前葉の土器が出土している。

SX-4201

SX-4201 は、東西 9.6m、南北 9.8m(内径)のほぼ正方形プランの方形周溝墓。平面検出にとどめており、時期など詳細は、不明。切合い状態から SB-4201 より新しいものと考えられる。

SX-4202

SX-4202 は、直径約 10.6m を測る円形プランの周溝墓の可能性はある。

(7) 小結

42 次調査では、環濠集落外西側で、予測されていなかった新たな環濠や建物跡が検出された。特に注目されるのは、壁立式平地建物（SB-4201、SB-4202）や井戸跡が検出され、その周囲を囲むかのように SD-4202 と SD-4203 が掘られ、その東側には木柱列（柵？）が SD-4202 に沿って立てられていることが明らかになった点である。SD-4203 は、出土した土器の型式により、畿内第Ⅳ様式前葉に位置づけられることから（註：2004 守山市教育委員会『下之郷遺跡－第 42 次・46 次発掘調査概要報告書－』）、この時期に環濠集落の 3 条環濠の西側に居住域が存在することが判明したのである。この事実を踏まえて考えると、現時点では解釈が定まってないが、二つの仮説を用意しておく。一つは、3 条の濠に囲まれた集落本体部分と別個の集落空間として、今回の居住域を考える説。もう一つは、3 条環濠に囲まれた集落本体部に付属して、集落空間が設けられ、さらに西側に外（周）環濠が掘られているとする仮説。現状では未だに判然としないが集落の構成や経年変化、機能分化を考えると、今回報告の居住域は集落研究にとって重要な意味を持っているといえよう。

10. 第43次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町字橋本 615-3、616-2 番地
- (2) 調査期間 平成12年7月12日 ～ 同年7月21日
- (3) 調査面積 60 m²
- (4) 担当者 川畑和弘

(5) 調査経緯と方法

第43次の調査地は、環濠集落の西端部分にあたる。調査の目的は、集落の外縁にある環濠の位置の把握である。調査は、重機にて表土（耕作土約30cm）を除去したのち人力と重機を併用して、その下にある淡灰白色土（床土約10cm）を除き、淡黄灰色土で遺構を検出した。今回の調査では、遺構の把握を主眼としたため、断割り調査は実施せず、記録を取った後は、埋め戻し原状復旧をした。

(6) 検出遺構

遺構は、環濠1条が確認された。

SD-4301（第3環濠）

SD-4301は、集落を周回する3条の環濠の中でも最も外側に位置するものと考えられる。

幅は、約7mを測る。第13次調査（昭和63年度実施）と第23次調査（平成8年度実施）で検出された環濠（SD-3403）の延長に位置するものと考えられる。

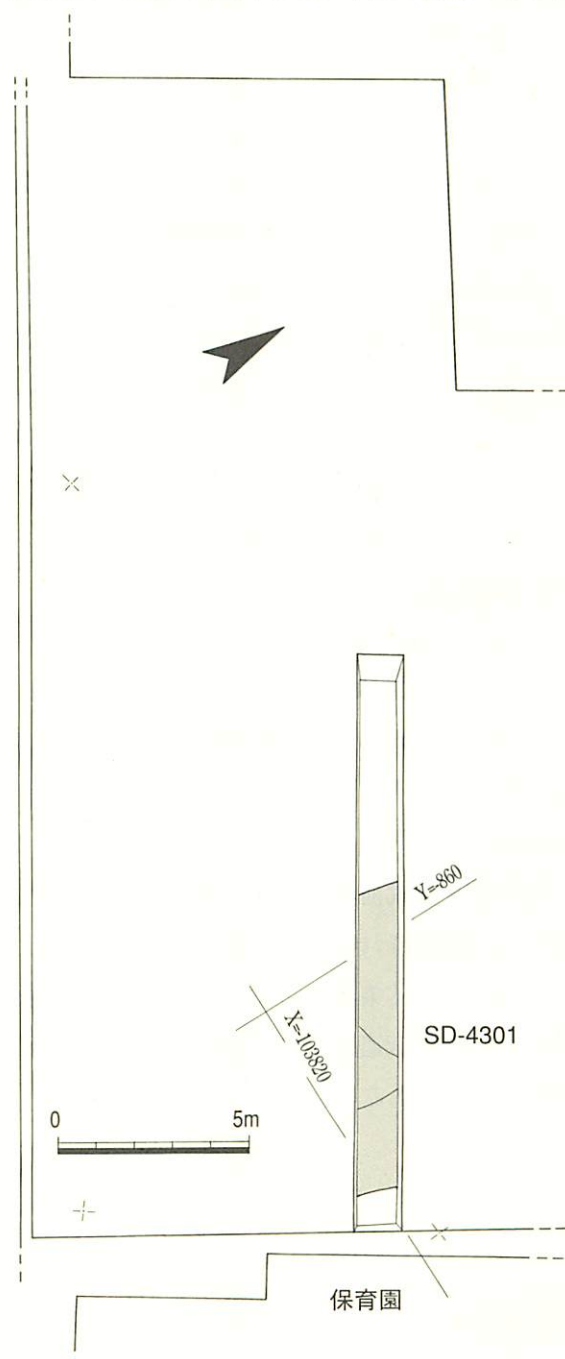


図18 第43次調査全体図

Ⅲ まとめ

本報告に掲載した調査のうち 34、35、36、37、39、41 次の調査は、環濠集落の東縁に掘られた環濠の位置を把握するための確認調査（指定範囲に関連する調査）であった。38 次は、個人住宅建築にかかる環濠集落内部の居住域の調査（指定候補地内の開発調整に関連する調査）、40 次は、集落中央部の様相や区画溝の所在を確認する調査（遺跡の性格究明を行うための範囲確認調査）、42 次は、環濠集落の西側未調査地域での居住域・環濠の調査（開発調査に関連する重要遺跡の範囲確認調査）、43 次は、集落西縁に掘られた 3 条環濠の位置を把握するための確認調査であった。以下で上記地点の調査成果をまとめておきたい。

1. 集落東側の環濠

34 次調査以前においては、集落東側の環濠周回位置や状態は判然としておらず、3 次、4 次、9 次、14 次調査の集落南側で判明している環濠の位置と 25 次（都市計画道路建設に伴う調査）、29 次調査で検出された環濠の位置から集落東側にも 3 条以上の環濠が円弧状に掘られているだろうと推測していた。しかし、一方では微地形復原の状態からすると居住域は北側の谷地形と南側の谷地形に挟まれた微高地に占拠していることがうかがえ、環濠はその地形の起伏に沿って合理的に掘られている。すなわち、居住域の北辺と南辺には谷に沿って環濠が掘られ、西辺には舌状に延びる微高地の先端を断ち切るように環濠が掘られた可能性があるが、東辺については円弧状に完全に環濠が周回するのではなく、河川や湧水域に向けて直線的に延びているものではないか、との推測も依然としてあった。今回、報告した 34 次以降の調査では、集落東辺の確認調査を進めた結果、環濠の掘削位置は推測のとおり、居住域の東限を円弧状に取り囲むように掘削されていることが明らかになり、環濠に囲まれた居住域の東西内径距離（西側第 1 環濠と東側第 1 環濠の間隔）はおおよそ 280m ということが推測されるようになった。また、東側環濠の条数については現時点で 4 本以上と推定することができるようにはなったが、最外環濠の位置や環濠帯の幅については、今後の調査課題となった。

2. 西側居住区の発見

42 次調査では、集落本体部分（3 条環濠で囲まれた居住域）とは別個の居住域が西側に存在していることが確認された。居住域内部からは、壁立式建物や井戸跡と共に木製農具や紡織具（緯打具）、甕など煮沸・調理用の土器など日常生活に給する道具が多数出土し、生活の場であったことがうかがえる。集落域の存在した年代幅は、今後さらに検証しなくてはならないが、これまでに確認されている土器型式で見ると畿内第Ⅳ様式前葉に並行する時期のものが主体的で、Ⅳ様式中葉のものは少ない。このことを集落の生誕から消滅の流れのなかで見ると、環濠集落形成の前半期には、すでにこの西側居住区が存在していたことになる。本体集落の内部にみる建物構成の経年変化や変遷などの動きと西側居住区の動きは、互いに脈絡をもって盛衰連動している可能性があるため、今後の集落内部の調査進展を踏まえ、検証を進めるべき重要な課題である。



第34次調査 調査地全景（北西より）



第34次調査 調査地全景（南東より）



第34次調査 遺構検出状態



第34次調査 遺構検出状態



第35次調査 調査地全景（南西より）



第35次調査 平面検出状態



第36次調査 調査地全景



第36次調査 平面検出状態



第37次調査 調査地全景（北西より）



第37次調査 平面検出状態



第38次調査 調査地全景（北西より）



第38次調査 平面検出状態



第39次調査 調査地全景（北東より）



第39次調査 平面検出状態



第40次調査 調査全景（北西より）



第40次調査 調査全景（南東より）



第40次調査 平面検出状態



第40次調査 平面検出状態



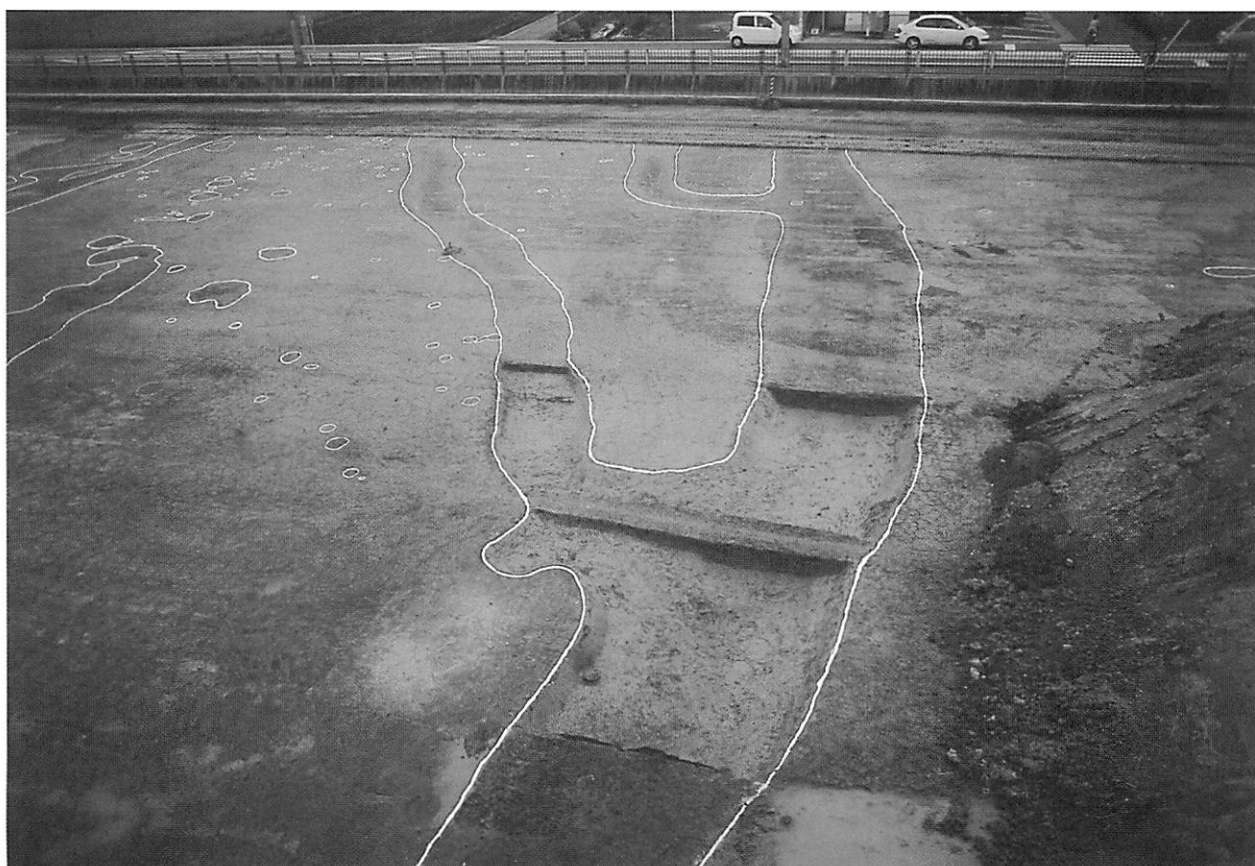
第41次調査 調査状況



第41次調査 調査状況



第42次調査 調査地全景（南東より）



第42次調査 調査状況



第42次調査 平面検出状態



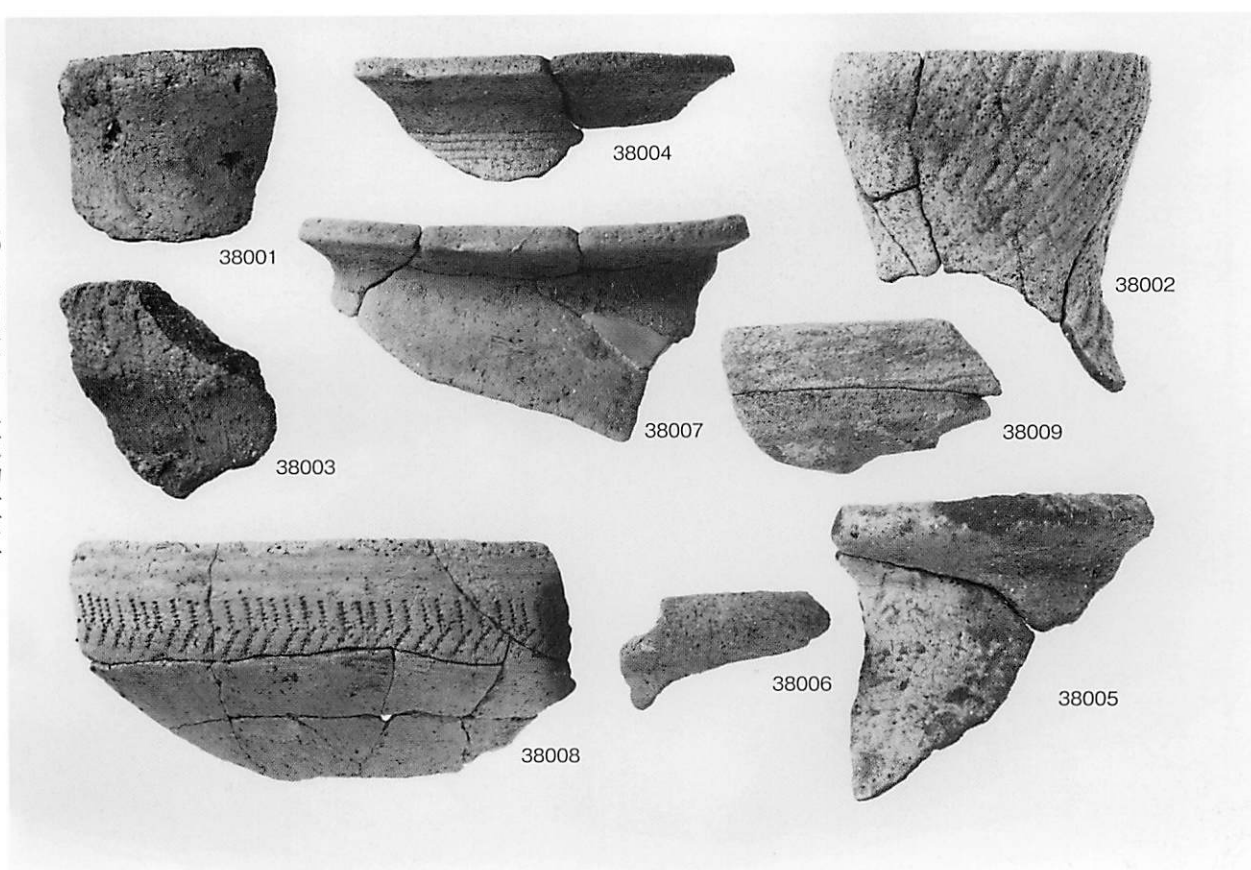
第42次調査 平面検出状態



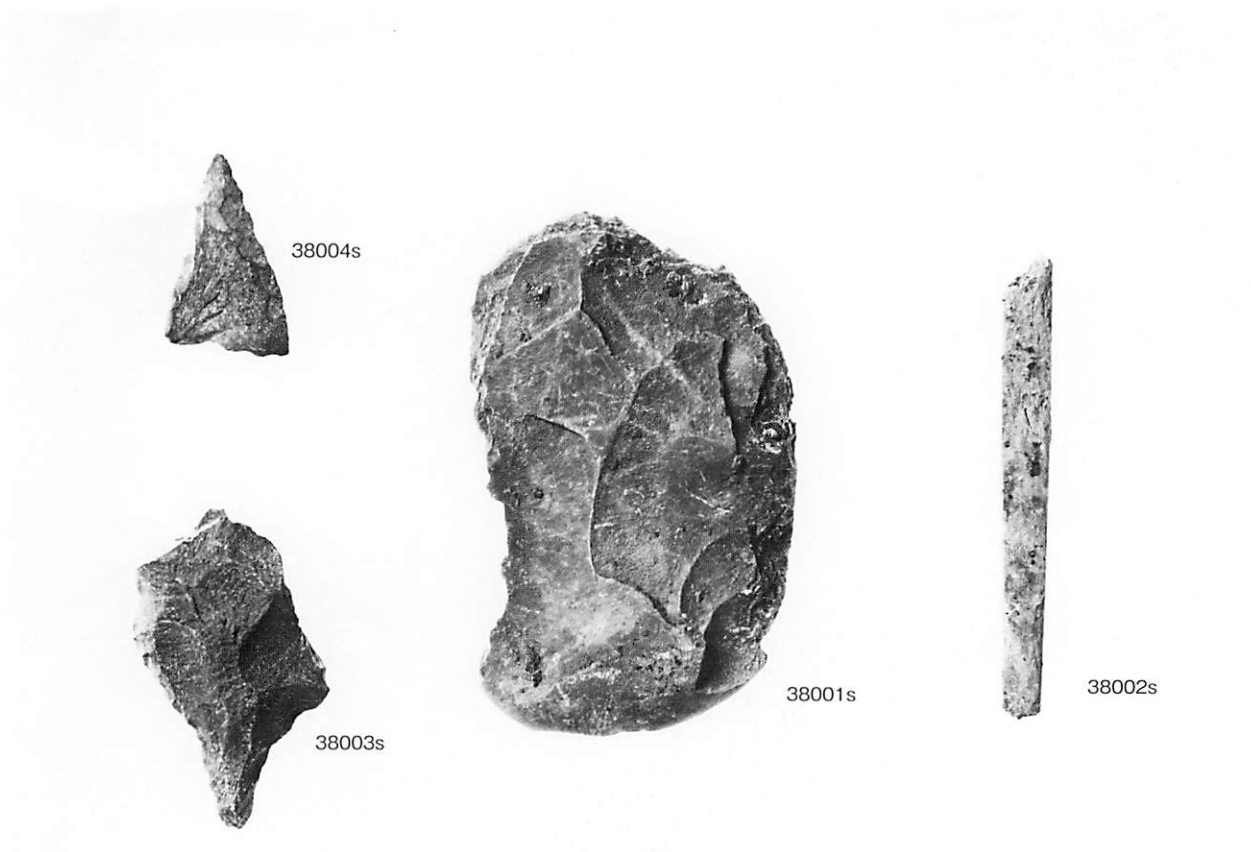
第43次調査 調査状況



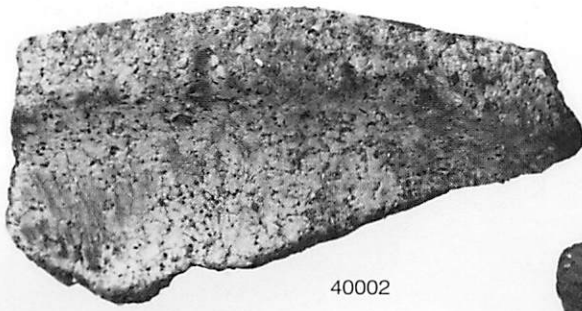
第43次調査 平面検出状態



第38次調査 出土土器



第38次調査 出土石製品



40002



40001



40003

第40次調査 出土土器

報 告 書 抄 録

フリガナ	シモノゴウイセキカクニンチョウサホウコクショ Ⅲ							
書 名	下之郷遺跡確認調査報告書 Ⅲ							
副 書 名	第 34・35・36・37・38・39・40・41・42・43 次調査報告書							
巻 次								
シリーズ名								
編 著 者 名	川 畑 和 弘							
編 集 機 関	守山市教育委員会							
所 在 地	〒 524-8585 滋賀県守山市吉身二丁目 5 番 22 号 TEL 077-582-1156							
発行年月日	平成 18 年 3 月							
所 収 遺 跡	所 在 地	コード 市町村	遺跡番号	北 緯 ° , ' , "	東 経 ° , ' , "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
下之郷遺跡 (第 34 次)	滋賀県守山市下之郷町 字シノ 204-1 番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	1999 年 8 月 4 日 ～ 9 月 4 日	400	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第 35 次)	滋賀県守山市下之郷町 字見田 217 番地他	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	1999 年 10 月 4 日 ～ 10 月 8 日	500	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第 36 次)	滋賀県守山市下之郷町 字見田 218-1・2 番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	1999 年 11 月 24 日 ～ 11 月 30 日	250	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第 37 次)	滋賀県守山市下之郷町 字シノ 202-1 番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	1999 年 12 月 8 日 ～ 2000 年 1 月 8 日	500	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第 38 次)	滋賀県守山市下之郷町 字北黒田 676-1 番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	1999 年 12 月 20 日 ～ 12 月 28 日	477	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第 39 次)	滋賀県守山市下之郷町 字平川端 705-1 番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2000 年 1 月 31 日 ～ 2 月 29 日	400	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第 40 次)	滋賀県守山市下之郷町 字井上 635-1 番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2000 年 5 月 8 日 ～ 6 月 8 日	250	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第 41 次)	滋賀県守山市下之郷町 字幸徳庵 240 番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2000 年 5 月 16 日	10	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第 42 次)	滋賀県守山市下之郷町 字上門田 539-1 番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2000 年 6 月 12 日 ～ 7 月 31 日	3,986	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第 43 次)	滋賀県守山市下之郷町 字橋本 615-3 番地 他	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2000 年 7 月 12 日 ～ 7 月 21 日	60	重要遺跡 範囲確認
所収遺跡	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特 記 事 項
下之郷遺跡 (第 34 次)	集落	弥生中期		環濠		弥生土器		
下之郷遺跡 (第 35 次)	集落	弥生中期		環濠		弥生土器		
下之郷遺跡 (第 36 次)	集落	弥生中期		環濠		弥生土器		
下之郷遺跡 (第 37 次)	集落	弥生中期		環濠		弥生土器		
下之郷遺跡 (第 38 次)	集落	弥生中期		溝、柱穴、土坑		弥生土器、石製品		
下之郷遺跡 (第 39 次)	集落	弥生中期		環濠		弥生土器		
下之郷遺跡 (第 40 次)	集落	弥生中期		溝、柱穴		弥生土器・石製品		
下之郷遺跡 (第 41 次)	集落	弥生中期		環濠		弥生土器		
下之郷遺跡 (第 42 次)	集落	弥生中期		大溝、掘立柱建物		弥生土器・石製品		
下之郷遺跡 (第 43 次)	集落	弥生中期		環濠		弥生土器		

下之郷遺跡確認調査報告書 Ⅲ

－第 34・35・36・37・38・39・40・41・42・43 次調査報告書－

発 行 日 平成 18 年（2006）3 月

編集・発行 守山市教育委員会

滋賀県守山市吉身二丁目 5 番 22 号

印 刷 株式会社 スマイ印刷工業